

2025年8月17日礼拝メッセージ

1. 導入: ヤコブが祝福を奪い取る物語の背景にある家族の問題

この説教は、創世記26章34節から27章13節をテキストとし、ヤコブが祝福を奪い取る物語の背後にある「家族の問題」に焦点を当てています。一般的な事件報道が表面的な事実から始まり、時間が経つにつれてその背景にある家族関係や生い立ちに言及するようになるのと同様に、この物語も祝福の篡奪という出来事の裏に隠された、より深い家族内の問題が浮き彫りにされています。

2. エサウの自己中心性(創世記26:34-35)

この箇所からは、エサウの「自己中心性」が顕著に見て取れます。

- ・結婚相手の自己決定: エサウが40歳で結婚する際、当時の慣習に反して親の合意なしに自身で結婚相手を決めています。これは非常に例外的な行動であり、エサウが自分の意思を優先する自己中心的な性格であったことを示唆します。
- ・カナン人との結婚: エサウが結婚相手に選んだのは、ヒッタイト人ベエリの娘ユディトとヒッタイト人エロンの娘バセマテでした。これは、イサクの結婚相手を探す際にアブラハムが「このカナンの女たちの中から結婚相手を見つけてはならない」と指示したことと対照的です。エサウは、信仰や文化的な背景を考慮せず、自身の好みで相手を選びました。
- ・神学者による見解: ある神学者は、このようなエサウの行動は、彼が「正式な光継者としてふさわしくない」ことを示していると指摘しています。

また、この箇所からはイサクの「怠慢」な姿も見えて取れます。アブラハムがイサクの結婚のために僕を遣わしたのと異なり、イサクはエサウの結婚に介入しませんでした。その理由として以下の推測が挙げられます。

- ・リベラルな考え方: 自身が親に結婚相手を決められた経験から、子供の自主性を尊重したいという考えがあった可能性。
- ・エサウへの偏愛: イサクがエサウを非常に愛していたため(創世記25:28「イサクはエサウを愛していた。獲物を好んでいたからである」)、強く介入できなかった可能性。

これらの側面から、エサウの自己中心性とイサクの親としての役割における怠慢がこの家族の分裂の根源にあることが示唆されます。

3. イサクの秘密主義(創世記27:1-4)

イサクがエサウに祝福を与えようとする場面からは、彼の「秘密主義」が浮き彫りになります。

- ・祝福の重要性の認識: イサクは祝福が持つ重要性を認識していました。ヤコブに祝福を与えてしまった後に大きな衝撃を受けることから、その重要性を理解していたことが分かります。
- ・こそこそとした行動: しかし、イサクはその重要な儀式を家族全体に共有することなく、エサウだけを呼んで「こっそり」と行おうとしました。
- ・神の御言葉への背反: イサクは、リベカが神から受け取った「兄が弟に仕える」という預言(創世記25:23)を知っていたはずですが、それにもかかわらず、自身の偏愛から神の計画とは異なる

方法でエサウを祝福しようとしていました。この秘密裏の行動は、イサクが自身の行動に「やましさ」を感じていたことを示唆しています。

メッセンジャーは、私たち自身も「公開すると喧嘩になりそうなこと」をこっそり行う傾向があるとし、このような秘密主義が家族や組織において問題を引き起こす可能性を指摘しています。

4. 派閥主義と家族内の分裂(創世記27:5-10)

リベカがイサクとエサウの秘密の会話を盗み聞きし、ヤコブにエサウに成り代わって祝福を得るよう指示する場面からは、「派閥主義」という家族内の分裂が明確になります。

- ・リベカの行動の疑問: リベカは、イサクの不適切な計画を知ったにもかかわらず、夫に直接問い質すことなく、すぐにヤコブに話を持ちかけました。これは、彼女がイサクと話すことが無意味だと考えていたわけではなく(27:46でイサクに結婚相手のことで話していることから)、むしろ家族内に明確な「派閥」が存在していたことを示唆しています。
- ・二つのグループ: イサクとエサウのグループ、そしてリベカとヤコブのグループという二つの派閥が形成され、それぞれが自身のグループの「利益」や「勝ち負け」を最優先に考えていたと推測されます。
- ・派閥主義の特性: 派閥主義の特性として、以下の点が挙げられています。
自分たちのグループの利益だけを考える。
他のグループに対する勝ち負けを重視する。
- ・相手を自分の有利な方向に動かすことだけを考えて話し合い、誠実な対話をしない。
- ・リベカの積極性: リベカは行動的な人物であり、その積極性が自身の派閥の利益を確保するために、イサクとエサウを「いかに騙すか」という計画に用いられました。

この派閥主義は、家族だけでなく、社会、そして特に「教会」においても問題となり得ることが強調されています。

5. 教会における派閥主義と解決策

メッセンジャーは、コリント書を引用して、教会における派閥主義の問題と、その解決策について深く掘り下げています。

- ・コリント教会の分裂(第一コリント1:11-12): コリント教会は、「私はパウロにつく、私はアポロに、私はケファに、私はキリストに」と主張するグループに分かれ、争っていました。これは、単なる考え方や感じ方の違いだけでなく、「働き」の重要性を巡る対立もあったと解釈されます。
- ・パウロ派: 教会を設立する「働き」が重要。
- ・アポロ派: 教会を成長させる「働き」が重要。
- ・様々な働き: 伝道、教育、事務、奉仕(料理、修繕)、礼拝奉仕(メッセージ、伴奏、賛美)など、教会には多様な働きが存在し、それぞれが「自分の働きが最も重要だ」と考えがちになる危険性。
- ・神が成長させるという視点(第一コリント3:7): パウロは、このような派閥主義に対して、「大切なのは植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です」と語ります。すべての働きは神によって導かれ、等しく価値があることを強調しています。
- ・「体」の比喻による一体性(第一コリント12:25-26): パウロは、教会を「体」に例えて、その一体性を説きます。

「それは体の中に分裂がなく、各部分が互いのために同じように配慮し合うためです。一つの部分が苦しめばすべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれればすべての部分が共に喜ぶのです。」

体のどこか一部が痛むと全体が苦しむように、教会においても一部の傷みは全体に影響します。家族が一人苦しんでいれば全体が心配し、喜んでいれば全体が共に喜ぶのと同様に、教会も一体となるべきです。

一体性を実現するためには、「お互いにコミュニケーションをとる」「自己開示をする」「愛し、愛される」といった当たり前のことが重要であると強調されています。

・教会の模範的役割: 教会は「地の塩、世の光」として、世において「一致する姿、平和である姿、互いに愛し合う姿」を示すべき存在です。特にキリストにあっては、ユダヤ人も異邦人も、男も女もない一つの体としてまとまるべきであり、普通の社会や家族以上に互いに愛し合うことが大切です。

・初代教会の解決例(使徒の働き6:1-6): 初代教会では、ギリシャ語を話すユダヤ人とヘブル語を話すユダヤ人の間で、やもめへの食料配給における差別(ギリシャ語を話す側が軽んじられていた)という問題が生じました。

使徒たちは、祈りと御言葉の奉仕に専念するため、執事(奉仕者)を選出することを提案しました。

選ばれた7人の執事(ステファノ、ピリポなど)は、全員がギリシャ語系の名前を持つ人物でした。これは、多数派であるヘブル語を話すユダヤ人からではなく、少数派であるギリシャ語を話すユダヤ人の中から指導者を選び、全体の上に立てるという「解決法」でした。これは非常に困難かつ斬新な解決策であり、聖書が示す分裂への対処法として紹介されています。

6. ヤコブの自己保身(創世記27:11-13)

ヤコブが母リベカの計画に対して抱いた懸念は、その道徳的な問題ではなく、「肌が滑らかで、父に触れられれば、祝福どころか呪いを招くことになる」という自己保身でした。

・道徳的判断の欠如: ヤコブは、母親の計画が道徳的に問題があることを指摘せず、もっぱら計画が「うまくいくか、いかないか」という成功・失敗の観点からのみ考えていました。

・派閥的思考の浸透: これは、彼がすでに派閥的な考え方に慣れ親しんでいたため、自分たちのグループの行動が道徳的か、あるいは神の目に良いことかという視点を失っていたことを示しています。

7. 結論: 悪意と邪悪のパン種を取り除くことの重要性

この説教は、家族や教会、組織における分裂が、今日においても常につきまとう問題であることを強調し、その解決策として「悪意と邪悪のパン種を取り除く」ことの重要性を第一コリント5章8節を引用して締めくくっています。

・パン種の比喻: パン種は少し混ぜるだけで全体を膨らませるように、私たちの心に生じる分裂を招く「思い」や「考え」は、放っておくと取り返しのつかない事態に発展します。

・早期の問題解決: イサクの怠慢や秘密主義、リベカの派閥主義、ヤコブの自己保身といった傾向は、私たち自身の心にも存在します。これらが小さな段階で生じた時に、早めに「取り除く」努力をすることが必要です。

- ・コミュニケーションと自己開示: そのためには、「お互いに自己開示をして、自分が何を考えているのかを信頼できる人に話す」ことや、「共に問題を解決する」ことが重要です。抱え込まずに話すことで、問題が膨らむのを避けることができます。
- ・教会の真の姿: このような努力を通じて、教会は分裂するのではなく、「キリストにおいて一致する」姿を世に示すことができるようになります。それは、教会が世の模範となるべき存在であるという役割を果たすことに繋がります。

最終的に、メッセンジャーは、神が喜ばれない「パン種」を祈りや兄弟姉妹との対話によって取り除き、教会が真に一致した共同体となるよう促し、毎週の礼拝を共に喜ぶことができるよう祈りを捧げています。